

「縁」を語る

さだまさしと山本健吉の親交が
つなぐふるさとのかおり
さだまさしアコースティックライブ



おりなす八女で10月13日(祝)、八女市制60周年・合併5周年記念事業 さだまさしアコースティックライブが開催されました。これは、さださんと八女市無量寿院に眠る文芸評論家・山本健吉さんが親交の深かった縁により実現したものです。山本健吉さんの在りし日の思い出やふるさとについて、たっぷり語っていただいた2時間半のコンサートでした。

山本健吉さんとさだまさしさん

さださんと八女のつながりは平成24年5月7日、山本健吉さんの25回忌法要に参列するために無量寿院(八女市本町)をさださんが訪れたことに始まります。本堂

で法要が終わったあと、参列者の前で健吉さんとの思い出を語り、健吉さんが大変褒めてくれて生前よく歌っていたという『防人の詩』を献歌したさださん。さださんは、健吉さんのお墓を守ってくれている八女の人々に大変感謝し、再び八女の地で歌うことを約束しました。今回このような縁でコンサートが実現。当日は健吉さんの長女・石橋安見さんも来市。安見さんはさださんとともに10月10日(金)に八女市立図書館2階に開館した『山本健吉資料室』を見学し、そのあとコンサートを楽しましました。

一番辛かった時に支えてくれた

心配された台風の影響もほとんどなく、コンサート会場となったおりなす八女ホールは満席。さださんの登場に、

割れるような拍手と歓声が沸き起こりました。台風情報にやきもきしたというさださん。山本健吉さんとは同郷(長崎)であり、家族同然のつきあいがあったこと、精神的支柱であったことを語り、故人との思い出の曲『防人の詩』を熱唱しました。

「一番辛かった時、さだは暗いとぼろぼろに言われていた時に、堂々と僕を弁護する文章を新潮45に書いてくれた。それがどれだけ弱くなった僕の心を支えてくれたことか。世界中が敵でも山本健吉が味方なんだと思っただけ瞬間にね、いやなこと何かもぱつと消えていくの。本当の僕の父親以上の存在であったと思います」

健吉さんの最初の妻であり、安見さんの実母である石橋秀野さんについて『素晴らしい俳人』と讃えるさださん。

「絶句となった『蟬時雨』児は擔送車に追ひつけず』の句では、自分が死ぬ間際の時にもお母さんという生きものは子どもを思っただけでびっくりしました。石橋秀野に非常に興味を持ってパソコンで調べているうちに八女の杉山先生のブログにたど





さだまさしと山本健吉対談写真(ゆめいくみはびい[参]
さだまさし(新書館)より複写:撮影/斉藤健一)

さだまさしさん からのメッセージ♪

(さだまさしアコースティック・ライブ
パンフレットより)



25・6歳の頃だ。僕が『お爺ちやま』と慕っていた同郷の偉人、今里広記さんに山本健吉先生に引き合わされたのは新橋の料亭金田中だった。同じ日に哲学者の谷川徹三先生、仏文学者の葦原英了先生、現役だった王貞治さんとも一緒させていただき、僕は宴会のテーブルの隅っこで小さくなっていた。以来皆さんにかわいがっていただいたが、殊に山本健吉先生は僕を我が子のようにかわいがってくださった。当時山本一家の長男は角川春樹さん、僕が次男坊と呼ばれたほどだ。『防人の詩』が勝った戦争映画の主題歌であったことから「好戦的」「右翼的」などと批判にさらされ、折から「さだは暗い」という揶揄とともに僕は世の中を敵に回したような気持ちに追い詰められていたころ、山本先生は新潮45に『さだまさし頌』という一文を寄稿してくださり僕を弁護してくださった。この当時は酒席によくお相伴させていただいたものだが、ある時山本先生が僕の耳元でささやかれた。『防人の詩』は良い。あれはね、昭和文学史に残るよ。僕が凍りついていると、先生は続けられた。「僕が残す」と。

世の中すべてを敵に回しても山本健吉が味方だ、と思ったとき、僕の心の中にわいてきた勇気が、今までの僕のすべてを支えたと思う。まことに生命の恩人だ。安見さんのことを当時から『お姉ちゃん』とよんできたが、お姉ちゃんが『石橋秀野』の実娘だと知ったのは、つい最近のことだ。八女にお住まいの杉山洋先生のブログにたどりついて、杉山先生にも様々な教えいただいた。ご縁はこうして果てしなく広がってゆく。山本一家の次男坊は、大したものを残さずに生きて来たが、いやいやこれからこそ先生に褒めていただく仕事をしなければと、心に命じているところだ。山本健吉はこころの父である。



平成24年

山本健吉 25 回忌法要にて

平成24年5月7日、無量寿院で行われた山本健吉さんの25回忌法要に参列したさださん。墓参りのあと本堂で法要に参列し、健吉さんとの思い出を語り、八女の皆さんに感謝の言葉を述べました。「25年目の法要にお招きいただいたので、ありがたくお参りさせていただきまし

た。山本先生は文学に貢献した、俳句にはものすごい力を注がれた偉大な文学者です。あれだけの人が置き去りにされていたらどうしようとの恐怖心がありました。けれど八女の無量寿院という立派なお寺で、地元の人たちが守ってくれている。ちゃんと先生の居場所があるということにほっとしています。八女の皆さんに大変感謝しています」

りつきました。すぐに連絡を取らせていただいて、そのご縁で25回忌にお参りさせていただくことになりました。石橋秀野がつないでくれたんですね。今回、市制施行60周年・合併5周年記念という大事な時によんでいただき感謝します」と話しました。

また再び八女の地で

家族でさださんのコンサートに行っていたという健吉さん一家。さださんは「僕らの仕事は下りのエスカレーターを昇っていくようなもの。立ち止まった瞬間にもっと後に下がる。音楽や文化・芸術はそんな仕事。必死でたかかっている。年を取るということはどういうことか。できることがどんどんできなくなっていくと思っているのは間違い。うまくなるんですよ。僕は歌もだ

いぶんうまくなった、ね？」と、最前列に座る安見さんに問うと「20には20の、30には30の、40には40のうまさがあると思います」と応じた安見さん。当意即妙に拍手がわき起こりました。

笑いあり、涙あり、感動の2時間半のコンサートが終了し、市長がさださんへ花束を贈呈しました。また再び、さださんの歌を八女の地で聞く日が訪れますように。



三田村市長からさださんに花束のプレゼント

山本健吉

資料室オープン

石橋秀野

日本を代表する文芸評論家で文化勲章受章者の山本健吉と、妻で俳人の石橋秀野の遺作品等を展示する「山本健吉資料室」が10月10日(金)八女市立図書館本館2階にオープンしました。八女市には遺族から1万2千余点の資料等が寄贈されており、それらを再整理し、「山本健吉夢中落花文庫」を改名、新装開館したものです。現在、写真や直筆の原稿、写真、愛用品など110点を展示しています。夫妻がともに展示されている資料室は全国でここだけであり、石橋秀野の再評価につながることも期待されています。



(上) 昭和63年4月に島原にて撮影 (下・左) 石橋秀野の資料 (下・右) 健吉愛用の品々

さだまさしさんと石橋安見さんが資料室を見学

10月13日(祝)コンサートのため八女市を訪れたさだまさしさんと、山本健吉さんの長女・石橋安見さんは山本健吉資料室を見学しました。懐かしそうに資料に見入る二人。さださんは「石橋秀野という素晴らしい俳人の再評価につながることを期待します」と開館を祝いました。

安見さんは「今にも父が出てくるよう。27年間の歳月があったという間に縮まった感じがします。今回まさしさんも一緒に来てくれたことを、父はとても喜んでくれると思います。島崎藤村の『血につながるふるさと』、心につながるふるさと……の言葉を思い出しました」と語りました。

八女をととても大切に思っていました

午前中、安見さんは石橋家の菩提寺となる無量寿院を訪れ墓参りをし、法要を済ませました。

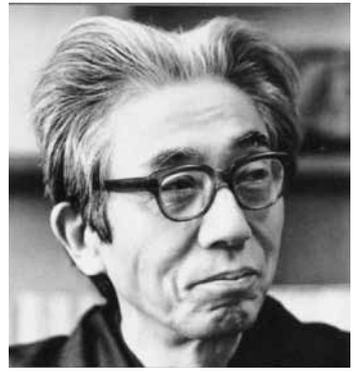
「八女の皆さんにはお世話に

三田村市長の案内で資料室を見学するさださんと安見さん



なり大変感謝しています」と安見さん。石橋家と八女のつながりについて次のように語っていただきました。

「石橋家は清和源氏の血筋を引く肥前出身の武士で、天正年間に星野村に住み代々医者をしていました。父健吉も、健吉の祖父の石橋養元が生きていたころはよく八女に遊びに来ていたそうです。健吉の父・忍月は、八女のほかに家を建てなかつた。『将来隠居する時は八女に帰ってくるつもりだったのだろう』と父は言っていました。父も先祖伝来の土地をととても大事に思っていました。『お茶は八女茶が一番よい』と常々言っていました。八女をととても大切に思っていました」



やまもと けんきち
山本 健吉

明治40年(1907)～昭和63年(1988)

文芸評論家。石橋忍月(八女市黒木町出身)の三男として長崎市に生まれました。本名は石橋貞吉。大正13年長崎県立長崎中学校より慶應義塾大学文科予科に入学し、2年間英文学者で詩人の西脇順三郎に師事。昭和3年文学部国文学科に進学し、折口信夫に師事。日本文学史・芸能史に目を向ける契機となりました。昭和4年、文化学院在学中の秀野と学生結婚。昭和6年大学を卒業後、改造社に入社。雑誌「俳句研究」に携わり、俳句批評に精進するようになりました。戦中から戦後にかけて、京都日日新聞社文化部長や角川書店勤務を経て、昭和30年『芭蕉』で新潮社文学賞を受賞。翌31年『古典と現代文学』で読売文学賞を受賞するなど、批評家としての地位を確立。その後も古典文学に関する優れた評論を発表し、昭和58年文化勲章受章。国文学の豊かな素養をもつ数少ない評論家として、古典から現代まで鋭い評論活動を展開しました。俳句の研究でも知られています。昭和63年5月7日死去。81歳。『浄土宗若泰山光明寺無量寿院』(八女市本町)の「石橋氏累代之墓」に眠ります。



いしばし ひでの
石橋 秀野

明治42年(1909)～昭和22年(1947)

俳人。父・藪楢太郎、母由栄の四女として奈良県山辺郡二階堂村(現・天理市)に生まれました。奈良県師範学校附属小学校を卒業後、家族とともに上京。

文化学院中学部に入学。学監与謝野晶子に短歌を、高浜虚子に俳句を学びました。昭和4年慶應義塾大学生石橋貞吉(山本健吉)と学生結婚。家庭の事情により同学院を自主退学します。昭和13年頃から本格的な句作に精進。その後俳誌「鶴」を代表する女流俳人として活躍します。

昭和17年長女安見誕生。昭和20年夫が島根新聞社勤務となり松江に移住。翌21年夫が京都日日新聞社論説委員となったため京都に転居。その後肺結核と腎臓病を病み、昭和22年9月26日国立宇陀野療養所にて逝去。38歳。上記の墓に眠ります。

没後、昭和23年第1回川端茅舎賞(現代俳句協会賞)を受賞。翌24年、夫健吉により句文集『櫻濃く』が発刊。平成22年長女安見(山本安見子)により『石橋秀野の一〇〇句を読む』が発刊。



下木家
住家
「堺屋」

山本健吉・石橋秀野夫婦句碑

平成11年5月7日健吉の祥月命日に除幕建立(山本健吉・石橋秀野句碑建設委員会)会長・今里允昭)されました。碑文はともに二人の絶句で代表作。秀野の句は直筆、健吉の句も原稿等から二字ずつ選び出されています。夫婦句碑ということで、桜御影石を同じ大きさで真つ二つに割り、二つの石をかみ合わせています。

こぶし咲く 昨日の今日となりしかな 健吉
蝉時雨 児は擔送車に追ひつけず 秀野

ふるさとを愛した石橋忍月

館の
「石橋忍月
文学資料館」



いしばし にんげつ
石橋 忍月
(1865～1926)

文芸評論家であり山本健吉の父・石橋忍月(本名・友吉)は黒木町湯辺田に生れ、黒木小学校で学びました。のちに福島町(八女市)の叔父石橋養元(眼科医)の養子となります。帝国大学生の時に、森鷗外の小説『舞姫』に厳しい批評を展開しました。その後、二葉亭四迷や坪内逍遙といった明治の文豪たちの文芸評論を新聞雑誌で展開し、当時の文壇に大きな影響を与えました。山本健吉は、『石橋忍月に関する二章』で次のように述べています。

「忍月は、湯辺田を一生なつかしがっていた。明治の初年に彼は湯辺田から黒木町の学校に通った。その祇園神社の藤を『予が幼少時代の知己』と言っている。また子どもの頃矢部川の水に潜って鮎を捕まえたことを語っている。日田の三隅川、人吉の球磨川と並べて、彼は矢部川を誇っているのである」



忍月の生家は「学びの館(黒木町)」に「石橋忍月文学資料館」として移築されています。